

[A年] 降誕前第8主日(2024年11月3日)

【旧約聖書日課】 イザヤ書 44章6~17節

- 6 イスラエルの王である主
イスラエルを贖う万軍の主は、こう言われる。
わたしは初めであり、終わりである。
わたしをおいて神はない。
- 7 だれか、わたしに並ぶ者がいるなら
声をあげ、発言し、わたしと競ってみよ。
わたしがどこしえの民としるしを定めた日から
来るべきことにいたるまでを告げてみよ。
- 8 恐れるな、おびえるな。
既にわたしはあなたに聞かせ
告げてきたではないか。
あなたたちはわたしの証人ではないか。
わたしをおいて神があるのか、岩があるのか。
わたしはそれを知らない。
- 9 偶像を形づくる者は皆、無力で
彼らが慕うものも役に立たない。
彼ら自身が証人だ。
見ることも、知ることもなく、恥を受ける。
- 10 無力な神を造り
役に立たない偶像を鑄る者はすべて
- 11 その仲間と共に恥を受ける。
職人も皆、人間にすぎず
皆集まって立ち、恐れ、恥を受ける。
- 12 鉄工は金槌と炭火を使って仕事をする。
槌でたたいて形を造り、強い腕を振るって働くが
飢えれば力も減り、水を飲まなければ疲れる。
- 13 木工は寸法を計り、石筆で図を描き
のみで削り、コンパスで図を描き
人の形に似せ、人間の美しさに似せて作り
神殿に置く。
- 14 彼は林の中で力を尽くし
樅を切り、柏や檜の木を選び
また、樅の木を植え、雨が育てるのを待つ。
- 15 木は薪になるもの。
人はその一部を取って体を温め
一部を燃やしてパンを焼き
その木で神を造ってそれにひれ伏し
木像に仕立ててそれを拝むのか。
- 16 また、木材の半分を燃やして火にし
肉を食べようとしてその半分の上であぶり
食べ飽きて身が温まると
「ああ、温かい、炎が見える」などと言う。
- 17 残りの木で神を、自分のための偶像を造り
ひれ伏して拝み、祈って言う。
「お救いください、あなたはわたしの神」と。

【使徒書日課】 ローマの信徒への手紙 3章21~28節

21ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。22すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。23人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、24ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。25神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。26このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。27では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。28なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。

【福音書日課】 マタイによる福音書 23章25~36節

25律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。杯や皿の外側はきれいにするが、内側は強欲と放縦で満ちているからだ。26ものの見えないファリサイ派の人々、まず、杯の内側をきれいにせよ。そうすれば、外側もきれいになる。27律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。28このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている。29律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりしているからだ。30そして、『もし先祖の時代に生きていても、預言者の血を流す側にはつかなかったであろう』などと言う。31こうして、自分が預言者を殺した者たちの子孫であることを、自ら証明している。32先祖が始めた悪事の仕上げをしたらどうだ。33蛇よ、蝮の子らよ、どうしてあなたたちは地獄の罰を免れることができようか。34だから、わたしは預言者、知者、学者をあなたたちに遣わすが、あなたたちはその中のある者を殺し、十字架につけ、ある者を会堂で鞭打ち、町から町へと追い回して迫害する。35こうして、正しい人アベルの血から、あなたたちが聖所と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼカルヤの血に至るまで、地上に流された正しい人の血はすべて、あなたたちにふりかかってくる。36はっきり言うておく。これらのことの結果はすべて、今の時代の者たちにふりかかってくる。』

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書44章6～17節

- 6 イスラエルの王なる主
イスラエルを贖う方、万軍の主はこう言われる。
私は初めであり、終わりである。
私のほかに神はいない。
- 7 誰が私と同じように宣言し
これを告知し、私に並べ立てるだろうか。
私とごしえの民を起こしたときから
起ころうとすること、来るべきことまで
彼らに告知させよ。
- 8 恐れるな、おびえるな。
昔から私はあなたに聞かせ
告げてきたではないか。
あなたがたは私の証人。
私のほかに神があるうか、
私のほかに岩があるうか、私はそれを知らない。
- 9 偶像を形づくる者は皆、空しく
彼らが慕うものは役に立たない。
彼ら自身が証人だ。
彼らは見ることもできず、知ることもできず
ただ恥じ入るだけだ。
- 10 誰が神を形づくり
何の役にも立たない偶像を鑄たのか。
- 11 見よ、その仲間たちは皆恥じ入る。
職人たちは人間にすぎない。
皆集まって立ち向かうが
恐れて共に恥じ入る。
- 12 鍛冶職人は炭火で斧を作り、槌でそれを形づくる。
力ある腕でそれを作る
腹がすけば力がなくなり、
水を飲まなければ疲れてしまう。
- 13 木工は測り縄を張り、筆で印を付け
小刀で造り上げ、コンパスで印を付け
人の形に似せて
人間の美しさに似せて造り、神殿に置く。
- 14 彼は杉を切り
松や樅の木を選んで
林の木々の中で育てる。
また、月桂樹を植え、雨がそれを成長させる。
- 15 それは自分の薪となる。
人はそれを取って暖まり
燃やしてパンを焼く。
さらに、神を造ってそれを拝み
偶像に仕立ててその前にひれ伏す。
- 16 また、その半分を火の中で燃やし
その上で肉をあぶって食べ
あぶり肉で満ち足りる。
さらに、暖まって
「ああ、暖かい、炎を感じる」と言う。
- 17 そしてその残りを神に造り上げ、自分の偶像とし
その前にひれ伏して拝み、祈って言う。
「救ってください、あなたは私の神だから」と。

ローマの信徒への手紙3章21～28節

21しかし今や、律法を離れて、しかも律法と預言者によって証しされて、神の義が現わされました。22神の義は、イエス・キリストの真実〔別訳→への信仰〕によって、信じる者すべてに現わされたのです。そこには何の差別もありません。23人は皆、罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっていますが、24キリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより価なしに義とされるのです。25神はこのイエスを、真実による、またその血による〔別訳→その血による、また信仰による〕贖いの座〔別訳→宥めの献げ物〕とされました。それは、これまでに犯されてきた罪を見逃して、ご自身の義を示すためでした。26神が忍耐してこられたのは、今この時にご自身の義を示すため、すなわち、ご自身が義となり、イエスの真実に基づく者〔別訳→イエスを信じる者〕を義とするためでした。

27では、誇りはどこにあるのか。それは取り去られました。どんな法則〔別訳→律法〕によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。28なぜなら、私たちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。

マタイによる福音書23章25～36節

25律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたがた偽善者に災いあれ。あなたがたは、杯や皿の外側は清めるが、内側は強欲と放縦で満ちている。26ものが見えないファリサイ派の人々、まず、杯の内側を清めよ。そうすれば、外側も清くなる。

27律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたがた偽善者に災いあれ。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。28このようにあなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法とでいっぱいである。

29律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたがた偽善者に災いあれ。あなたがたは預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりしている。30そして、『もし先祖の時代に生きていたなら、預言者の血を流す側には付かなかつたであろう』などと言う。31こうして、自分が預言者を殺した者たちの子孫だと、自ら証明している。32あなたがたも、先祖たちが犯した罪の升目を〔直訳→先祖たちの升目を〕満たすがよい〔異本→満たすことになる〕。33蛇よ、毒蛇〔クサリヘビ〕の子らよ、どうしてあなたがたはゲヘナの裁きを免れることができようか。

34だから、私は預言者、知者、学者をあなたがたに遣わすが、あなたがたはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、ある者を会堂で鞭打ち、町から町へと迫害して行くであろう。35こうして、正しい人アベルの血から、あなたたちが聖所と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼカルヤの血に至るまで、地上に流された正しい人の血がことごとく、あなたがたにふりかかってくる。36よく言うておく。これらの報いはみな、今の時代の者たちに降りかかってくる。』

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・11月3日「降誕前第8主日」の日課主題は「墮落」。11月第一日曜日は、日本基督教団でも伝統的な教会暦に基づいて「聖徒の日」と定めている。「聖徒の日」は、西方教会が11月1日および2日に記念してきた「諸聖人の日」と「全死者の日」を踏襲して定められている。いずれにしても「死者の記念」に充てられた記念日で、古いケルト人の年越し祭を置き換える形でこの日付が定められてきた。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、神の自己告知と偶像批判が預言として告げられる箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、信仰に基づく「神の義」について告げる箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、主イエスがファリサイ派の人々を偽善者として糾弾される箇所。

旧約日課(イザヤ 44 章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。前8世紀後半に南王国ユダの宮廷預言者として四代の王に仕えた祭司イザヤの預言句集と預言活動記事によって構成されている。ただし、通説では、歴史的預言者イザヤに帰されるのは1~39章までであり、40章以下は、おそらく150年以上後代のイザヤを「預言者的伝統」の祖と見る集団によって付加された預言句集と考えられている。これは、40章以下に歴史的預言者イザヤの時代とは異なるペルシア王キュロスの名が登場することが主要な根拠とされた解釈。40章以下を分けて扱う場合、「第二イザヤ」の呼称が用いられる。日課箇所は「第二イザヤ」に含まれる。

・「第二イザヤ」は、歴史的預言者イザヤとは時代背景が異なり、両者では告げられる預言句の持つ意味も異なってくる。歴史的預言者イザヤの時代(前8世紀)は、軍事力で圧倒するアッシリア帝国の強圧的支配によって地域諸王国の盟主であった北王国イスラエルが滅ぼされた時代であり、南王国ユダもアッシリアへの積極的服従を余儀なくされていた。それまで北王国を支えてきたのは、各地に散在する多くの地方聖所集団であり、そこではいわゆるカナン宗教の伝統を受け継ぐ部族神を「偶像」として祀る例も少なくなかったとされる。他方、「第二イザヤ」の時代は、バビロン捕囚を経てかつての南王国ユダを構成していたユダ族末裔らは、バビロンをはじめとするメソポタミア宗教に多大な影響を受け、さらには新しくペルシアによってもたらされたアリア人宗教(原始ゾロアスター教など)にも触れ始めていた。バビロニア帝国をほぼ無血で併合したペルシアは、支配地での宗教文化に寛容であったが、ペルシアによる支配は、それまで絶大な権威を誇っていたバビロンを中心とするメソポタミア宗教を相対化し、荘厳な神殿で祀られていた諸神の「偶像」の権威も無力化されていくことになった。

・ペルシア支配時代(前6世紀中ごろから)以降、オリエンタル世界の宗教文化は大きく変化した。ササン朝ペルシアの時代(後3世紀~)に国教とされたゾロアスター教は、キュロス王のアケメネス朝時代にはいまだ発展途上にあり相対的な影響力しかなかったとされるが、この時代以降、地上の「偶像」を排して概念化された天上世界の神を崇拝するという宗教形態が広がるようになっていったと考えられている。日課箇所も、そのような時代背景の中で「神」理解が鮮明にされていく過程が反映されているものと考えられる。

使徒書日課(ローマ 3 章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てた書簡で、自身のローマ訪問計画を事前に伝えて受け入れてもらうために、また、その後に計画しているエスパーニア宣教事業への協力を要請するために、著されている。その際、これまでの自身の活動経歴に関連してローマ教会共同体の人々に疑念を抱かれている恐れがあることを自覚しているパウロは、自分の福音理解を丁寧に提示することで、訪問とその後の宣教事業協力を受け入れてもらおうと考え、そのための紙幅を割いていると推察される。パウロは、かつて自身の回心体験に基づいて徹底的な福音理解(「ガラテヤ書」で主張されているような、律法に基づく割礼をはじめとするユダヤ人生活規範の完全否定)を主張したため、バルナバ宣教団からの離脱を余儀なくされた時期があった。しかし、マケドニア宣教を経て至ったコリントでの宣教事業をローマ教会共同体出身者らと協力して取り組むことを通して、自身の主張を緩め、より調停的で、むしろ徹底的に包摂的な福音理解を土台とするようになったと推認される。本書簡では、そのような調停的で包摂的な福音理解を旧約聖書に基づいて体系的に展開しようとしている。

・日課箇所は、「信仰による義」を述べている箇所であり、1:16~17と共に、本書簡で展開している議論の土台となる基本テーゼを述べているとみなされてきた。しかし、原文の解釈についてはいくつかの議論が継続している。

・22節「イエス・キリストを信じることにより」の直訳は、「イエス・キリストの信仰を通して」。26節「イエスを信じる者を」の直訳は、「イエスの信仰からの者を」。「イエス(キリスト)の信仰」と直訳した原文は、文法上「イエス(キリスト)についての信仰」とも解釈されうるとされて、「イエス(キリスト)を信じる信仰」などと訳されてきたが、原文直訳のように、イエス(キリスト)の属性としての「信仰(ピスティス)」に焦点を合わせることで、K.バルトの指摘以来、関心を集めてきた。その際、「ピスティス」は、人間の信心態度としての「信仰」とは区別して解されるのが適切であると考えられ、「信頼」あるいは「誠実」などの訳があてられたり、(聖書協会共同訳では)「真実」の訳をあてる試みもされている。「ピスティス」の原義は、「忠実/誠実/信頼」など。

・27節「法則」は、前後で「律法」と訳されているのと同じ原語「ノモス」の訳。訳語を「法」に統一すれば、次のような直訳になる。「…どんな法を通してか。実行という法か。いいえ、そうではなく信仰という法を通してだ」。これに続いて 28 節は、次のように直訳される。「というのは、わたしたちは、法の実行なしに信仰が人間を義とすると考えている」。パウロは、単純に「律法」批判をしているわけではなく、「実行(行い)」の典拠として「律法」を位置づける理解を退ける一方で、「信仰(信頼)」の典拠としての「律法」を「義」の根拠として位置づけようとしている。

・このパウロの議論を、「行為義認」を退けて「信仰義認」を主張している、と解するのは早計である。本書簡の文脈の中で、「実行(行い)」の典拠としての「律法」というのは、ユダヤ人がユダヤ人たる根拠としている「割礼」や「食物規定」などさまざまな生活習慣の実践を基礎づけるものとしての「律法」のことを指している。それを遵守し、実行することで「ユダヤ人らしさ」を保っており、それによって枠づけられる「ユダヤ人」集団を「救いの共同体」と同一視することが、当時の主流のユダヤ教における教えであった。パウロは、「救いの共同体」への参入が、そのような生活習慣の「実行(行い)」によって「ユダヤ人」らしくなることによってではなく、神からの恵みの提示としての「キリスト」を信頼して誠実に向き合う「信仰」によって、つまり「キリスト(を信じる者)」に参入することによってなされる、と主張している。つまり、パウロの主張は、「行い」一般に対する否定ではなく、「ユダヤ人らしくなる行為」に対する否定である。

福音書日課(マタイ 23 章より)

・日課箇所は、主イエスが律法学者やファリサイ派の態度を批判されたことを伝える記事の一部。「ルカ」はほぼ同じ内容の記事を伝えているが、「マタイ」のようにこれを「群衆と弟子たち」(23:1)に向けて語られたものとしてではなく、ご自分を食事に招いてくれた「ファリサイ派の人」(ルカ 11:37)や「律法学者」(同 45 節)に面と向かって語られたものとして伝えている。「マタイ」は、主イエスのファリサイ派批判を、もっぱら弟子たちに向けた警告として位置づけて伝えていると考えられる(「山上の説教」なども同様)。

・「ルカ」の並行記事と比較すると、「マタイ」が特異的に「偽善者(ヒュポクリテース)」という用語を繰り返していることがわかる。この語は、「マタイ」が特異的に用いている(新約 17 例中、マタイ 14 例、ルカ 3 例)。「ヒュポクリテース」は、元来「演じること/装うこと」を意味する語から派生しており、「俳優/役者」を指して用いられる語。原義には、「偽善」という否定的なニュアンスは含まれないが、「演じた姿」ゆえの内面と外面の乖離した状態を問題とすることを意図して、この語が用いられていると考えられる。「山上の説教」で、「偽善者」を取り上げて、「隠れたことを見ておられる父」に目を向けさせた 6 章の教えも参照。

来週の誕生日 (11 月 3 日～9 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-10「今こそ人みな」は、17 世紀ドイツの代表的讃美歌作家 P・ゲルハルトが同時代の教会音楽家 J・クリューガーとのコンビで作った讃美歌の一つ。
- ・21-566「むくいを望まで」(= I 536)は、19 世紀米国でフレンド派の家庭に育ちユニバーサリスト派の牧師として矯風運動にも携わったフィービ・ハナフォードがコヘレト 11:1 に着想を得て作詞。曲は不詳。
- ・21-399「さすらいの民よ」は、金城教会信徒・棚橋峰子が『21』編纂に先立つ創作讃美歌公募に応じて作詞。病気療養の中で作詞された。曲は、この歌詞に付する曲公募に応じて、阿佐ヶ谷教会員でアマチュア合唱指揮者の岸一隆が作曲。

21-10「今こそ人みな」

Nun Danket All und Bringet Ehr

1. Nun danket all und bringet Ehr, / ihr Menschen in der Welt, / dem, dessen Lob der Engel Heer / im Himmel stets vermeldt,
2. Ermuntert euch und singt mit Schall / Gott, unserm höchsten Gut, / der seine Wunder überall / und große Dinge thut.
3. Der uns vom Mutterleibe an / frisch und gesund erhält / und, wo kein Mensch nicht helfen kann, / sich selbst zum Helfer stellt.
4. Der, ob wir ihn gleich hoch betrübt, / doch bleibt gutes Muths, / die Straf erläßt, die Schuld vergibt / und thut uns alles Guts.
5. Er gebe uns ein fröhlich Herz, / erfrische Geist und Sinn, / und werf all Angst, Furcht, Sorg und Schmerz / ins Merres Tiefe hin.
6. Er lasse seinen Frieden ruhn / in Israelis Land, / er gebe Glück zu unserm Thun / und Heil zu allem Stand.
7. Er lasse seine Lieb und Güt / um, bei und mit uns gehn, / was aber ängstet und bemüht, / gar ferne von uns stehn.
8. So lange dieses Leben währt / sei er stets unser Heil / und bleib auch, wann wir von der Erd / abscheiden, unser Theil.
9. Er drucke, wenn das Herze bricht, / Uns unsre Augen zu / und zeig uns drauf sein Angesicht / dort in der ewgen Ruh.

21-566「むくいを望まで」

Cast Thy Bread upon the Water

1. "Cast thy bread upon the waters, / Ye who have but scant supply; / Angel eyes will watch above it; / You shall find it by and by; / He who in his righteous balance, / Doth each human action weigh, / Will your sacrifice remember, / Will your loving deeds repay.
2. "Cast thy bread upon the waters; / Sad and weary, worn with care, / Wherefore sitting in the shadow? / Surely you've a crumb to spare. / Can you not to those around you / Sing some little song of hope, / As you look with longing vision / Thro' faith's mighty telescope?
3. "Cast thy bread upon the waters," / Ye who have abundant store; / It may float on many a billow, / It may strand on many a shore; / You may think it lost forever, / But, as sure as God is true, / In this life, or in the other, / It will yet return to you.